

藤 永 太 一 郎*

財団法人 海洋化学研究所が恩師石橋雅義先生の遺志をついで、関連学術領域の発展に絶えざる努力を重ねてきた成果が最近着々と挙ってきていることは前号本誌にも報告した通りであります。

すなわち、昨年設定されました海洋化学学術賞（石橋賞）は山本俊夫博士が第一回の受賞をされ、今年には桑本融博士が選ばれました。同賞には賞状と賞金と共に正賞（メダル）の授与が定められておりましたが、その授与が遅れておりましたところ、此度、石橋家の格別の御好意によって先生の描かれた水彩画「海洋夜景」を原図として使わせて頂き、美事に完成致しました（別掲写真参照）。よって来る11月23日の本研究所主催の秋季シンポジウム「湖・海底界面の化学反応」に際し、両受賞者に贈呈申しあげる予定であります。なお今後は春の授賞式に揃えて贈呈できるようになると存じますので、近付いております第3回受賞候補者の御推薦につきましても皆様に格別の御関心を頂きたく存じますと共に、改めてこれまでの御協力下さいました推薦者、選考委員の皆様へ深謝申し上げます。

併せて昨秋に、本研究所は「環境分析と新センサー」国際シンポジウムを主催致しました。国際純粋応用化学連合（IUPAC）・日本化学会・日本分析化学会の御共催を頂き、特に日産科学振興財団には多額の御助成を頂きましたお陰でございますが、世界11ヶ国から273人の参加下さった盛会で成功裡に終了致しました。そのアブストラクトは前々号に掲載した通りですが、此度その招待講演14編はIUPACからプロシーディングスとして出版されました。組織委員長、京都大学化学研究所 松井正和教授の研究室及び本研究所において同書の閲覧と購入手続きができます。同じシンポジウムの成功につきまして向坊隆東大名誉教授始め関係各位の御盡力に重ねて敬意と謝意を表します。

さて、最近の学術・経済の進歩は、一次生産よりもむしろ情報収集と優れた解析によってもたらされる事が多くなりました。本研究所でも最近研究協力者の間における協力研究によって大きな萌芽研究が生まれたので、その要旨をいち早く本号に速報致しました。海洋の自動観測装置を創作し、それによる継続観測データは本来海洋化学と環境評価に使われてきたのでありますが、精細な解析の結果、生命起原物質の生成について大きな知見が得られたというもので、今後の発展が期待されます。このような成果が、試験管一つ持たない研究所の単なる頭脳の結集によって生れた事は、その評価は今後にまたねばなりません。今の時代の研究方法の一典型として興味ある事でもあります。もとはと言えば島根大学理学部 橋谷教授の宍道湖・中海の環境地球化学研究とそれを支援した紀本岳志氏（いずれも海化研研究協力者）らのグループのシンポジウム（酒をのみながらの研究雑談）から生れたものであります。この内容についても23日のシンポジウムで改めて討論されることになっております。

話の都合上あとになりお詫びしなければなりません。本号には海洋学会と海水学会の御好意ある許可を得て石橋先生の御業績論文を再録させて頂きました。若い読者にはその研究構想の大きさと研究方法の斬新さに打たれることであらましよう。然し、われわれ古い者にとってもその想いは変わりません。

最後に、桑本融氏（受賞講演）・西川泰治氏（石橋記念講演）には御多用にも拘らず玉稿御寄せ下さいまして有難うございました。本誌が一層恒常性を保つことになりましたのは両稿のお陰でございます。

*（財）海洋化学研究所 理事長